

ギルピン『モラル・コントラスト』における「モラル」

“Moral” in Gilpin’s *Moral Contrasts*

今 村 隆 男

Takao IMAMURA

2008年10月1日受理

1.

ウィリアム・ギルピン(William Gilpin)は、イギリス国内のマージナルな地域への主として1770年代の景観旅行に基づいて1780年代に出版された、一連のピクチャレスク紀行文で一躍有名になったが、その後の1790年代の活躍については『ニューフォレスト森林紀行』(*Remarks on Forest Scenery, and Other Woodland Views*, 1792)の出版以外にはあまり知られていない。この時期に彼が残したものとしては、ニューフォレストのボーダー教会の牧師として書いた「説教」的とも言えるいくつかの作品がある。90年代にはいってピクチャレスク・ブームが過去のものになり始めると共に、紀行文におけるギルピンの名声は翳りを見せ、その風景描写の単調さや浅薄さが揶揄の対象になることが多くなっていった。そのような中で聖職者として名誉を取り戻すべく書かれた、これら「説教」的な作品の一つに『モラル・コントラスト』(*Moral Contrasts: or, The Power of Religion Exemplified under Different Characters*, 1798)がある。本稿ではこの作品を取り上げ、その中でギルピンが言っているのはどのような「モラル(moral)」であったのかを、同じ時期に書かれた他の作品との関連を踏まえながら考察してみたい。

2.

『モラル・コントラスト』は、実在の人物の記録とフィクションを織り交ぜて創作した二人の主人公、ウィロウビィ(Mr. Willoughby)とリー(Sir James Leigh)の生涯を対照的に描き出したナラティブである。この作品でギルピンは、宗教的信仰心の相反する二人の生涯を戯画的に思えるほどに極めて単純明快に説教的に描き出すことによって、キリスト教の美德が「モラル」の点で望ましい生き方を送る上でいかに大切かを訴えている。

この作品は殆ど読まれることはないと思われるので、概要を追いつつながら作品を分析してみたい。主要な二人の登場人物の持つ対照性は、両者が受けた教育の違いから始まっている。ウィロウビィは、常に信心深い父親の近くから離れず、牧師のもとで徹底的な宗教的教育を受けるが、一方、同年代のリーは、パブリック・スクールから大学に進学し、グランド・ツアーでイタ

リアまで行って贅沢生活を身につける。その後、二人は共に成人した頃に父親が死んで、財産を相続することになる。領地を譲り受けたリーが、すぐに取りかかったのが「土地改良(improvement)」である。

If you walked near his house, you saw groups of labourers, here, and there, and everywhere — removing ground — widening rivers — building bridges — or employed in other expensive operations; none of which had been well considered, or was conducted with the least taste, or judgment; for he had too high an opinion of himself to follow the advice of anyone. His projects were all in opposition to nature. He seemed to delight in difficulties. If a piece of rising ground stood in his way, instead of casting about, how to turn it into a beauty, he would immediately order it, tho of considerable dimensions, to be removed. (32-33)

「至るところで、土地を動かし、川を広げて橋をかけ、様々なお金のかかる操作を行う」リーの「土地改良」は、明らかに当時流行していたブラウン(Capability Brown)・レプトン(Humphry Repton)的な庭園の大規模な「土地改良」を想起させる。また、気まぐれに川の流れを三度も変えるなど(37)、他人の意見に耳を貸そうとしない思慮の浅さ、独善性もリーの特徴である。そして、「土地改良」にかかる莫大な費用を捻出するためにリーが行ったのは、領地内の全ての木を伐採して売却してしまうことであつた(32)。その反対に、ウィロウビィは「土地改良」には慎重で、何事も「エレガントさと経済性」(40)を重視し、「土地改良」に使われるべき費用を領地内の農民や自分の家庭教師への賃金に回そうとするなど、リーとの経済観念の違いは際立っている。

使用人や借地人との関係の相違も明瞭である。無計画的な「土地改良」によってリーは借金を重ね、使用人や隣人との関係は悪化するばかりである。リーは常に、彼らに対して全く配慮をしないのみならず、自分の使用人を「高慢に扱う」だけでなく「給与の支払いが悪い」ため、彼らから「尊敬されていない」(33)。

一方、ウィロウビィの使用人や借地人は、代々ウィロウビィ家と関わって来たがゆえに「先祖伝来の財産」(40)であるとされる。ウィロウビィは彼らを「家族」とまで呼び、深い「慈愛(benevolence)」を持って領民達に接していることが、何度も強調される。彼らの住居は領地の周囲の「彼の眼の届く範囲内」のあちこちに建ち並んでおり、それは庭園の「簡素な自然装飾」であると共に、侵入者の攻撃から領主である彼の屋敷を護るための「前哨基地」ともなっている(42-3)。つまり、ウィロウビィと領民は、領主を頂点とした緊密な主従の相互扶助の関係で結ばれているのである。ウィロウビィ自身が自らの先祖をことのほか大事にしていることも詳しく語られる。彼の唯一のささやかな贅沢は絵画の収集であるが、彼が集めているのは「ブランド」の画家の絵ではなく、無名の画家による自分の先祖の肖像画なのである。ウィロウビィに関してギルピンが強調しているのは、領主と領民、そして隣人をも含めた「繋がり(connections)」(69)と、その関係の継続性である。両者の関係は一代限りのものではなく、幾世代にも渡って受け継がれて来たものであるがゆえに、そこには長い期間をかけて築き上げた調和的共同体が存在するということになる。

対照的に語られて来た二人の人生の行く末もまた、極めて単純明快である。申し分のない結婚をして自分と同じような理想的な子供を得、幸せな老後を過ごしたとされるウィロウビィと比べ、リーの最後は哀れである。リーは借金を重ねた挙げ句、立ち行かなくなって打開策として国会議員に立候補する。しかし、「州内の主たるどの紳士達」からも軽蔑されていたリーは、「低く見積もっても2万5千ポンド」もの莫大な額をつぎ込んだにも関わらず、当然のことながら落選する。最後は、彼を甘やかしてきた母親からも、結婚せずに同居していた女性からも見放され、未だ47歳にもならない年齢で国外に逃亡するのである。

3.

「モラル」の重要性を強調しようとするギルピンによって創作されたリーのような人物像は、クーパー(William Cowper)の代表作『課題』(*The Task*, 1785)の第4巻「庭園(The Garden)」の中の一節で批判されている領主達と明らかな共通性を持っている。そこでクーパーは、「古き良き時代的美徳(the virtues of those better days)」(4 745)を失ってしまったフランス革命前夜のイギリス社会を批判しているのであるが、その矛先の一つは「すぐに取って代わられる(sooner to be supplanted)」(4 751)領主達に向けられている。この“supplanted”という表現は、木々の伐採やそれに伴う外来種の無秩序な植林が横行した当時のイギリスの森林事情を背景にしたものであるだろう。それを象徴的に示すかのように、経済的に困窮し始め

た彼がまず手を染めるのは、冬季に行われる領地内の木々の徹底的な伐採であり、その後に来るのが領地そのものの売却である。

He that saw
His patrimonial timber cast its leaf,
Sells the last scantling, and transfers the price
To some shrewd sharper, ere it buds again.
Estates are landscapes, gaz'd upon a while,
Then advertis'd, and auctioneer'd away.
(4 751-6)

ギルピンの描いたリー同様、クーパーが例に挙げるこの領主も「先祖伝来の」木々を「最後の小角材」に至るまで切り払う。彼らがそれで手に入れたお金をつぎ込むのは賭博であるが、リーの浪費の主たる原因も、競走馬を何頭も購入しての競馬趣味であった。また、賭博の他の浪費の原因は、ここでもやはり「土地改良」である。クーパーは、「時代の寵児」たる「魔術師」ケイパビリティ・ブラウンを名指しで批判している。

Improvement too, the idol of the age,
Is fed with many a victim. Lo, he comes —
The omnipotent magician, Brown appears.
Down falls the venerable pile, th' abode
Of our forefathers — a grave whisker'd race,
But tasteless. Springs a palace in its stead,
But in a distant spot; where more expos'd
It may enjoy th' advantage of the north,
And aguish east, till time shall have transform'd
Those naked acres to a shelt'ring grove.
He speaks. The lake in front becomes a lawn,
Woods vanish, hills subside, and valleys rise,
And streams as if created for his use,
Pursue the track of his directing wand
Sinuous or strait, now rapid and now slow,
Now murm'ring soft, now roaring in cascades
E'en as he bids. Th' enraptur'd owner smiles.
(4 764-80)

「土地改良」によって「湖は埋めたてられ、森は消え、丘は削られて谷は隆起する」と典型的なブラウンの手法の様子が語られるが、この表現もギルピンによるリーの庭園の変貌の様と重なるものであろう。このような「土地改良」の結果、周囲の木々を伐採し尽くして「むき出しの土地」に建つことになった屋敷には北風などが吹きすさぶが、その様子は、どこまでも広がる芝地を特徴とするブラウン式庭園を適切に表している。そして、そのための「莫大な費用」をまかなうため、「財産をとことんまで使い果たしてしまった」領主は、

リー同様、政界への虚しい進出をはかろうとする(783-90)。

このように比較すれば、クーパーとギルピンの描く墮落し切った領主の類似性は明白だろう。両者が共に嘆いているのは、地主階級の公共的「モラル」の喪失である。批判されている領主が政界に進出しようとするのは、地域の平和や安定のためではなく、個人的な借金の穴埋めのためであることは明らかである。18世紀末、産業革命と農業革命が進展しイギリスの伝統社会は大きく変動していった。社会の近代化に伴って新興ブルジョア層が勢力を増して旧来の地主階級に取って代わってゆく中で、クーパーとギルピンにとっての「古き良き時代」の「モラル」は失われていったのである。

4.

このような時代の大きなうねりを背景に、イギリスの調和した伝統社会の象徴となっていたのが、国内の至る所で大規模に伐採されて減少してゆく領地の森であった。「土地改良」の費用にあてるために領地内の全ての木を伐採して売ってしまうリーに対し、ウィロウビィは木々を大きく育てて先祖伝来の森を守ろうとする。

In the meantime Mr. Willoughby's improvements, which had gone on leisurely, had now attained great perfection. His trees were well-grown; and he had the satisfaction to see the plan, which he had originally formed with so much judgment, now opening more and more into scenes of beauty. Every thing as in excellent order: his trees, and his shrubs were healthy: his lawns and his walks perfectly neat.... It was one of his great pleasures to see his tenants under good roofs; and he thought nothing was lost by making every thing convenient about them. What timber he cut down, was only such as called for the axe; and in its room he planted thousands of trees all over his domains, where wood could possibly grow with advantage — in the corners of fields particularly.... (92-94)

ウィロウビィの「土地改良」は計画的で十分な時間をかけたものであり、今や彼の領地は豊かで美しく、健康的な「高木」や「低木」や「芝地」で覆われ、その木々の屋根の下で守られて領民達は幸せに暮らしている。「全ての領民が彼のもとで繁栄するのを見る(to see all his tenants thrive under him)のは、ウィロウビィ氏のたいなる喜びであった」(67)とされている

ように、領民を庇護する領地内の木々は、領主であるウィロウビィ自身を象徴的に示しているのである。

好ましい「趣味」や適切な判断を欠くリーのやり方は「全て自然に逆らう」ものとされていた一方で、ウィロウビィの自然への対応は次のように説明される。

It was one of his great rules also, never to fight with nature. Her clue guided all his operations. Where she led, he followed: and thus, at the same time he formed the most beautiful scenes, and saved more than three fourths of the expence, which his precipitate neighbour would have incurred by attempting the same thing. (38)

彼は「自然」を指針として、それにどこまでも従ってゆく。ここでは、望ましい導き手として捉えられている「自然」の存在が重要なキーワードであると言えるだろう。この時代の「自然」の持つ意義を考える時に注目したいのは、『フランス革命についての省察』(*Reflections on the Revolution in France*, 1790)などにおけるバーク(Edmund Burke)の社会論である。そこでバークは、フランスの革命思想の浸食からイギリス社会を守るため、秩序ある祖国の伝統的社会体制を擁護している。バークは、理想的な社会とは「時間」が「ゆっくりとではあるが、確かな足取り」で「部分部分もシステムも衝突しない」ように「補正し、和解除し、均衡を取る」ことによって築き上げてきた「何世代にもわたる事業」の成果であるとし、そのような社会の成立過程を自然が形成されてゆく様子を踏まえて「自然のプロセス (the process of nature)」と呼んでいる(281)。

それに応えるかのように、ギルピンはその「自然のプロセス」の考え方を森林の形成過程に当てはめる。

『ニューフォレスト森林紀行』の中で彼は、理想的な森林の姿を次のように描いている。

For all the other purposes of scenery, inferior trees, if they be full grown, answer tolerably well; and when intermixed with stunted trees, and brush-wood, as they are in all the wild parts of the forest, they are more beautiful, than if the whole scene was composed of trees of the stateliest order. Interstices are better filled; and a more uniform whole is produced. — Considered in this light a forest is a picture of the world. We find trees of all ages, kinds, and degrees — the old, and the young — the rich, and the poor — the stately, and the depressed — the healthy, and the in-

firm. The order of nature is thus preserved in the world.... (2 71-72)

多様な木々が「より統一した全体」を構成するのが、望ましい森のあり方である。「堂々たる木々」だけの森よりも、「劣った木々」、「発育阻害の木」や「下生え」などが交じり合って調和している場合、より森は美しくなるという。ここには、「高木」や「低木」や「芝地」から成っていたウィロウビィの森と同様の、「堂々たる木々」を頂点とする階層的な構造における調和が認められる。森林美を支えているのは、このような階層的な「自然の秩序」である。そして、この「自然の秩序」は、老若・貧富・健康と病弱といった多様性を含む「(人間の)世界」の秩序でもあるという。ここでは、階級的な社会の構成が明らかに肯定されている。従って、ウィロウビィの領地の森は、理想とされる地域社会、さらには、それを拡大したイギリス社会を象徴的に示す、一種のミクロコスモスであったと言えるだろう。

5.

ワッサーマン(Earl R. Wasserman)は、人間社会を自然や森林のアナロジーで表現する手法の典型的な例として、チェイン(George Cheyne)やバトラー(Joseph Butler)らによる18世紀前半の著作を挙げている。ギルピンとの比較において最も興味深いのは、バトラーの『宗教のアナロジー』(*The Analogy of Religion*, 1736)であろう。そこでバトラーは、「万物照応」の思想に基づいて、植物界と動物界、さらには自然界と人間社会の「モラル」との間には類似関係が存在するとして、次のように述べている。

Indeed the natural and moral constitution and government of the world are so connected, as to make up together but one scheme: and it is highly probable, that the first is formed and carried on merely in subserviency to the latter; as the vegetable world is for the animal, and organized bodies for minds. But the thing intended here is, without inquiring how far the administration of the natural world is subordinate to that of the moral, only to observe the credibility, that one should be analogous or similar to the other.... (151)

「万物照応」の思想によって、宇宙や自然界と人間界

などが類似関係を持つのは、それら全てに共通した神の意志が働いているからである。それゆえ我々は、身近な自然界の中に宇宙の仕組みを映し出す秩序や調和を見出し、それを人生や社会の一つの指針とすべきであるということになる。これらをわきまえることが「モラル」なのである。

ギルピンらが「自然」や森林の形成過程を手本とした社会の調和を論じる時、そこにはバトラーの理論を始めとする伝統的な自然神学の思想が色濃く反映されていたとすることができるだろう。ギルピンにとって、ウィロウビィの領地を覆う森は、神の意志に基づいた、あるべき人間社会の秩序を映し出したものである。リーに代表されるような、公共心を失って私利私欲を追う者が増えてゆく中で、ギルピンは「モラル」の衰退を嘆かざるをえない。『モラル・コントラスト』においてギルピンは、あるべき森の調和の中に見出せる秩序を人間社会の構成に当てはめるという伝統的な手段をナラティブ化することによって、「モラル」の復権を訴えたと言える。しかしながら、フランス革命への反動としてギルピンらが拠り所とした保守的で固定的な社会観は、19世紀にはいるとロマン派時代の人々らが自然の「秩序」よりも「成長」や「進化」を重視し始めることにより徐々に崩壊し、それに伴って「モラル」の意味も変化してゆく運命にあったのである。

参考文献

- Burke, Edmund. *Reflections on the Revolution in France, and on the Proceedings in Certain Societies in London Relative to that Event. In a letter Intended to Have Been sent to a gentleman in Paris.* London: J. Dodsley, 1790.
- Butler, Joseph. *The Analogy of Religion, Natural and Revealed, to the Constitution and the Course of Nature.* 1736; rpt. Oxford: Oxford University Press, 1833.
- Cowper, William. *The Poems of William Cowper.* Eds. Baird, John D., and Charles Ryskamp. 3 vols. Oxford: Clarendon Press, 1980-95.
- Gilpin, William. *Moral Contrasts: or, The Power of Religion Exemplified under Different Characters.* Lymington: J. B. Butter, 1798.
- . *Remarks on Forest Scenery, and other Woodland Views, (Relative Chiefly to Picturesque Beauty) Illustrated by the Scenes of New-Forest in Hampshire.* 2 Vols. London: R. Blamire, 1791.
- Wasserman, Earl R. "Nature Moralized: the Devine Analogy in the Eighteenth Century," *ELH* 20 (1953): 39-76.